

## 平成 25 年度 軽井沢土曜懇話会 コンサート

### 《Mozart plus One Part 2 ～R. シューマンとモーツァルト》

・大津純子(vn)、岡田知子(p)

<曲 目>

\* W. A. モーツァルト(1756～1791):ヴァイオリンとピアノのためのソナタ ニ長調 Kv306

\* R. シューマン(1810～1856):アダージョ とアレグロ 変イ長調 作品70

\* W. A. モーツァルト:ヴァイオリンとピアノのためのソナタ ヘ長調 Kv376

◆W. A. モーツァルト: ヴァイオリン・ソナタ ニ長調 Kv306, ヘ長調 Kv376

音楽に無理解だったザルツブルグ選帝侯大司教・コロレードとの確執が深まり、嫌気のさしていた21歳のモーツァルトは1777年から1778年に掛けて、母親(マリーア・アンナ)と共にパリに向けて、職探しの旅に出ます。旅の途中、マンハイムに立ち寄り、当時ヨーロッパ随一と謳われたマンハイム宮廷オーケストラを聴き、「マンハイム楽派」(初期古典派)の作曲家たちの技法を学ぶ機会を得ます。彼らの創作活動は、後のハイドンやモーツァルトたちの交響曲作曲法の基盤となりました。

“近代交響曲の父”とも言われるヨハン・シュターミツ(1717～57)は従来の弦楽合奏に、独立した機能をもった管楽器を加え、団員50名を超える豪壮な<マンハイム管弦楽時代>を現出させます。彼はクレッシェンド(<)やディミヌエンド(>)による表情豊かな表現を発明し、トレモロ奏法(同じ音を細かく速く繰り返す)などを駆使した新しい演奏法を編み出しました。その演奏はモーツァルトに大きな影響を与えます。当時のプファルツ選帝侯は芸術に対する大変な理解者であったため、マンハイムにはヨーロッパ各地から有能な音楽家たちが集まっていました。モーツァルトはこの地での就職を望みますが夢叶わず、やむなく1778年3月にパリに向かうこととなります。

しかし革命前のパリには彼を受け入れる余地はなく、空しい時を過ごすうちに母親は体調を崩して亡くなってしまいます。この頃の作品にはマンハイムの影響により管楽器の効果が著しい「パリ交響曲」(Kv297)、フルートとハープのための協奏曲(Kv299)、悲壮な気分を持ったKv310のイ短調ピアノ・ソナタ、同じく哀しみの伴うKv304(ホ短調)のヴァイオリン・ソナタなどの傑作があります。今日演奏されるKv306のソナタにもマンハイムの影響が強く反映されており、ピアノとヴァイオリンによるモチーフの追いかけっこ、また、まるでピアノ・コンチェルトと見紛うようなカデンツァの扱いなど、管弦乐的な手法がとても楽しい作品です。

1781年、ザルツブルグ大司教との積年の確執がついに頂点に達し。ザルツブルグ宮廷楽団に辞表を提出。マンハイムからの知人であったウェーバー家に下宿してウィーンでの独立生活を始めますが、モーツァルトはその下宿先の三女、コンスタンツェに心惹かれていきます(翌年二人は結婚)。ウィーンで初めて出版されたKv296(ハ長調)、そして今日演奏するKv376(ヘ長調)に始まる(Kv380までの)一連のヴァイオリン・ソナタは、モーツァルトの優秀な弟子であったアウエルンハンマー嬢に捧げられました。

◆R. シューマン：アダージョとアレグロ 変イ長調 作品70

1849年作曲。原題は「ロマンスとアレグロ」。

この「アダージョとアレグロ」は、ホルンの中でも、半音ごとの各音が全て自由に出せるヴァルヴホルンのために作曲されました。当時、この楽器用の独奏曲はまだほとんど書かれていませんでしたから、大変珍しい作品です。シューマンの、この楽器に対する興味の強さが窺われます。作曲者自身によって、チェロ独奏曲、ヴァイオリン独奏曲としての楽譜も残され（ホルン版とは、譜面の一部が微妙に異なる）ています。初演は1849年に非公式の場で、1850年に公式の場で行われました。

2005年の軽井沢土曜懇話会では、『自由と無限性への憧れ』～R. シューマンを巡るロマン派の巨匠たち～というタイトルでロベルト・シューマンを取り上げましたので、ご記憶の方々もいらっしゃると思います。彼の評論家としての活動はドイツ音楽界に強い刺激を与えるものでした。シューマンとモーツァルトの関連は特にはないのですが（笑）、モーツァルト作曲の交響曲第40番ト短調について、“ギリシャ風の軽やかさと気品を持ち合わせた作品” –というコメントを残しています。アダージョ部分の何ともいえない柔らかさ、優しさに心打たれ、今回のプログラムでご紹介することに致しました。

（大津 純子記）

\*「『自由と無限性への憧れ』～R. シューマンを巡るロマン派の巨匠たち～」のコンサートの映像は以下で公開しています。

・国立情報学研究所 動画チャンネル

<http://www.nii.ac.jp/event/videos/karuizawa/>

・国立情報学研究所 ホームページ 「軽井沢土曜懇話会」

<http://www.nii.ac.jp/event/karuizawa/archives/2005/>

プロフィール

■大津 純子（おおつ じゅんこ） ヴァイオリニスト

東京芸術大学、米国ジュリアード音楽院卒業。ジュリアード音楽院在学中にジュネス・ミュージカル・インターナショナル 及び カーネギー・ホール共催によりニューヨーク・デビュー。ニューヨーク・タイムズ紙上、音楽評論家レイモンド・エリックソン氏より、“卓越した演奏” “将来を大きく期待される音楽家” –と高い評価を受け、以後、ニューヨークを拠点に、本格的な米国内外での演奏活動を開始。セントルイス交響楽団、シモン・ポリバル・ヴェネズエラ国立オーケストラ他との共演、リサイタル・プログラム：〈The Artistry of Junko Ohtsu〉は、パブリック TV ネットワークにて全米30都市以上に放映、また米国各地でのラジオ放送出演も数多い。ロックフェラー三世財団より2年間に亘り特別グラント受賞。国際交流基金派遣にてロシア、チェコ、フィリピン、ベトナム、オーストラリアなど、欧州、アジア、中南米諸国にて公演し絶賛される。

『ヴァイオリンの詩〜ベル・エポック』、スペイン音楽選集『マラゲーニャ』(各・日本フォンテック)、『Prelude to a Kiss』(BAJ Records)などCD5枚をリリース。『マラゲーニャ』収録曲の E. グラナドス: ヴァイオリン・ソナタは、“素晴らしい録音・・・”(音楽評論家・諸石幸生氏)と評価高い本邦初録音となる。また、アメリカ女流演奏家と構成する Ecco Trio (ピアノ・トリオ)によるアルバム『アメリカ』は、<レコード芸術>誌「室内楽準推薦盤」に選出された。2011年2月、東北民謡集DVD『あいの風 ~ Wind from Northeast』をプロデュース、リリース(この収益全額は東日本大震災復興のために寄付)。その意想外な企画と、ヴァイオリンによる津軽・南部地方の民謡(編曲)演奏の新鮮なアプローチは称賛の的となる。

2002年、自ら企画・プロデュースした室内楽シリーズ『Good Old Days ~アメリカのく素敵ない時代>』は、日本のクラシック音楽シーンの盲点であった”知られざるアメリカ”にスポットを当てた意欲的な好企画として各界より注目を浴びる。

2004~11年、イラストレーター・和田誠、ジャズ・ピアニスト・佐藤允彦両氏と共にジャンルを超えて音楽を楽しもう、という意図のもと、<Junko and the Night and the Music>シリーズを開催。3人の異なるバックグラウンドを生かしたユニークな企画は好評を博す。2005年12月より<大津純子・心のコンサート>を年2回展開中。

2012年、新シリーズ<純子の音楽ミニ・キャラバン>(小さなお子さん・学生さん対象に“音楽の楽しみ”を届ける出張演奏会)を開始。また、2000年より毎秋、国立情報学研究所主催による<軽井沢土曜懇話会>(情報工学における権威、故・猪瀬博氏開設)に招かれてレクチャー・コンサートを行っている。現在、コンサート・プロデュース、執筆、講演の分野にも活動の場を広げている。

## ■岡田知子(おかだ ともこ) ピアニスト

東京芸術大学器楽科を卒業後、北西ドイツ音楽アカデミー・デトモルトへ留学。声楽の伴奏、器楽とのアンサンブルを学ぶ。K・シルデ、G・バイセンボルンに師事。1976年同校を首席で卒業。1977年1月ベルリン、メンデルスゾーン・コンクール、ピアノ・トリオ部門第一位入賞。同年10月ジュネーブ国際音楽コンクール、ピアノ・トリオ部門第二位(一位空席)及びスイス特別賞受賞。1978年帰国、以降アンサンブルピアニストとして活発なコンサート活動を続けている。

また来日演奏家との共演、CD録音、コンサートのプロデュース等々、多方面で活躍している。毎夏、草津夏期国際音楽祭、そしてスイスで開かれるチューリヒ・マスター・コースに専属ピアニストとして招かれている。

